

平成 30 年 9 月 28 日現在

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K03322

研究課題名(和文) 東アジア地域形成と「小国」行動原理の相互浸透モデルに関する研究 ラオスを事例に

研究課題名(英文) A study of the Interpenetration model between East Asia Regional Formation and Small States: in the Case of Laos

研究代表者

森川 裕二 (MORIKAWA, Yuji)

長崎大学・多文化社会学部・教授

研究者番号：90440221

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：複雑系の東南アジアとその下位地域(サブリージョン)としてのインドシナ地域における小国の役割を明らかにした。これまで大国間関係の力学の中で論じられてきた国際関係に対し、あえて小国をアクターに位置づけて、ラオスと地域形成の関連から調査してきた。とくに1990年代以降、広域アジアへと協力関係を「深化・拡大」させてきたASEAN(東南アジア諸国連合)リージョナリズムに積極的に呼応することにより、小国でありながらも東アジア国際関係のアクターとして自律的、主体的な役割を果たすメカニズムを明示した。そのなかで、緩衝剤としてASEANの役割の重要性が明らかになった。

研究成果の概要(英文)：This study focused on the role of small states in the complex system of Southeast Asia and Indochina as one of its constituent sub-regions. this research project clarified the formation of sub-regions by examining the role of Laos in regional formation, and also discussed the challenge of strengthening regional cooperation through an analysis of the subjective role played by small states. As a result of the research, One of findings have responded actively to the regionalism advocated by ASEAN, which, especially since the 1990s, has worked to deepen and expand cooperative relationships with the broader Asian region.

The case of Laos as one of ASEAN's smallest member states, suggests the importance of the role to be played as a buffering agent by the ASEAN regionalism of a federation of small states occupying a central position in an East Asian regional formation.

研究分野：国際関係

キーワード：国際関係論 小国論 リージョナリズム ASEAN

1. 研究開始当初の背景

冷戦終結後のインドシナ地域では、アジア開発銀行 (ADB) による「大メコン圏経済協力プロジェクト」(Greater Mekong Sub-region: GMS) を筆頭に多数の地域協力枠組みが始動し、この地域を東アジアにおける代表的なサブリージョン (下位地域) の一つの類型として位置づけて、新しい国際社会単位の萌芽として期待されてきた。現状は、域外の大国が関与する形で地域枠組みが重畳するように乱立し、共通の規範やその基底をなす思想的な根拠も稀薄な状況が続き、リージョン (地域) の所在の体系的な確認と、CLMV (カンボジア、ラオス、ミャンマー、ベトナム) といった国家群の、地域秩序の中での位置づけについての解釈をいっそう難しくさせている。

国境を跨ぐ開発による地域の変容は、従来の空間概念 (相対空間) に類比すれば、人的・物的相互交流の増大に伴う境界 (変容・侵犯・異種混交) の量的・質的変容のプロセスであり、同時に動態的な時空概念によれば、歴史・記憶と一体化したアイデンティティの多元化のプロセスとして解釈可能である。こうした空間・時空概念による複合的な分類に照らせば、GMS の開発プロジェクト、ASEAN のリージョナリズムそして冷戦後に一体的な市場化が進むインドシナ地域とラオスをはじめとするメコン川周辺諸国のリージョンの形成は、国家による新たな境界線の確定とみなすことが可能であろう。

この地域の小国の多くが 1990 年代以降、国家形成の途上にあり、同時に国家間協力により新しい地域の形成に取り組んでいる。越境する多様な国際関係主体の移動によってもたらされる地域の形成と変容は、国家の存在を相対化させながら広域的に一体性を増していく事象でもある。ラオスは、冷戦期の「緩衝国家 (buffer states)」あるいは「勢力均衡の中間地帯としての国家」という安全保障を外部に依存する構造から脱皮を図るため、地域開発協力と ASEAN 地域統合に積極的に関与してきた。

その相対空間の変容プロセスでは、(1) 境界を画定し中立性を維持した「国家形成」に向かおうとする政治的意思、(2) 開発援助・協力を通じて隣国との政治的結びつきを強め地域を形成するプロセスである。時空概念の変容プロセスにおいては、国家の「統合と相対化」の二つの対立するベクトルが作用する中で国家権力によって、国家とリージョンの境界を同時に確定するプロセスでもある。その複合的な地域空間の変容がラオスの国際関係に凝集された形で現出している。

ラオスにおいては、GMS 対象国のすべてと国境を接し、歴史・記憶に連動したアイデンティティの変容が、境界を介して隣接する他者 (国家) との関係によって他律的に決定する「境界国家」の側面と、主体的に境界

線を引き直し確定する側面の双方がある。

2. 研究の目的

東アジアをめぐる国際政治は、中国の台頭と国際秩序で覇権的な地位を占めてきた米国の影響力の相対的低下が進行するなど、パワーシフトの兆候を呈している。本研究の目的は従来、大国間関係の力学の中で論じられてきた東アジアにおける政治主体として小国の役割をラオスと地域形成の関連から明らかにすることである。とくに 1990 年代以降、広域アジアへと協力関係を「深化・拡大」させてきた ASEAN (東南アジア諸国連合) 地域主義に積極的に呼応しながら、ラオスは国際関係の中に埋め込まれてきた小国として果たす主体的な役割の分析を通じて、地域的な連携を強化していくための課題を考察する。

本研究の主眼はしたがって、<地域> 秩序の形成の中でのラオスの主体としての性格を「境界国家」と小国の自律の双方から明らかにすることである。

「統合と相対化」の力学下で進む小国ラオスの国家形成過程は、上述した通り、多数の開発協力枠組みからなる重層的なネットワーク型の国際関係のなかに埋め込まれており、地域全体の接続性が複雑に増大してきた。ラオスの国家形成も ASEAN 地域統合のプロセスとも連動した地域形成と一体となって、(1) 隣接する大国・中国、(2) 1975 年のラオス建国以来の「特別な関係」にあるベトナム、(3) 社会文化・経済の両面で強く依存するタイ それぞれとの二国間関係による複雑な政策協調ネットワークの中で進展している。

このように地域内にネットワークが重層的に形成されつつあることは確かであるが、国際社会単位としての一体性が醸成されているかという点では、いまだ発展途上と言わざるを得ない。現在でも、機能・制度面では、各国政府間の交渉によって ASEAN 中心の多国間連携が深化し「東アジア」地域を形成する動きが存在している。ただし、小国連合の ASEAN がネットワークの中核になった「逆ハブ・スポーク・システム」の構造をとりながら地域協力を目指す「東アジア」と、米国関与のアジア太平洋主義が拮抗する国際関係の背後には、グローバルな経済的相互依存を増大させながら、力と利益の場を探求する伝統的な国際政治の力学が働いている。

アジアの地域形成と国際秩序に関する先行研究の多くは、分析の主眼に大国を中心とする主要な国家間関係が据えられてきた。主権的な権力の多寡のみを基準にする限り、ラオスをはじめ冷戦後に ASEAN に加盟した体制移行途上の小国群は、国際関係の中で、働きかけられる客体とみなされる傾向にある。しかし東アジアの国際関係と地域形成の実態では、「力の政治」のみの所産ではないことは、ASEAN の例にとるまでもなく明瞭であ

る。世界に拡散してきた地域主義の研究では、新しい国際関係を規定しようとする小国の行動原理と規範の存在は看過できない。したがって、地域形成の文脈に即して力と利益を変数とした伝統的な国際政治の力学にラオスの行動原理の位相を重ね合わせて、大国及び周辺国との関係を論じ、地域の持続的発展と安全を維持していくための課題について空間・時空の双方からアプローチする。

3. 研究の方法

国際関係を律してきた権力政治に代わる新たな原理に基づく東アジア地域形成にアプローチするための理論の探求は超長期の取り組みである。本研究では、ラオスの国際関係とASEAN地域主義を事例にとりながら、東アジア国際関係の方法と理論を再考する作業である。したがって、本研究では次の2点の研究目標に合わせて、事例研究と理論研究の相互連携を念頭に入れて調査研究を実施した。(1) 3つの研究課題(「東アジア国際秩序とASEAN」「ASEAN地域へのラオスの関与」「ラオスの二国間関係と地域形成」)を連関させた事例研究、(2)「方法としての小国論」の研究で構成する。事例研究と理論研究を相互連携させるため、資料調査、政府関係者を中心とするヒアリングが主たる調査作業である。これらの調査を理論研究に随時フィードバックし、事例研究と理論研究、とくに方法論的理論との相互連携を実現した。

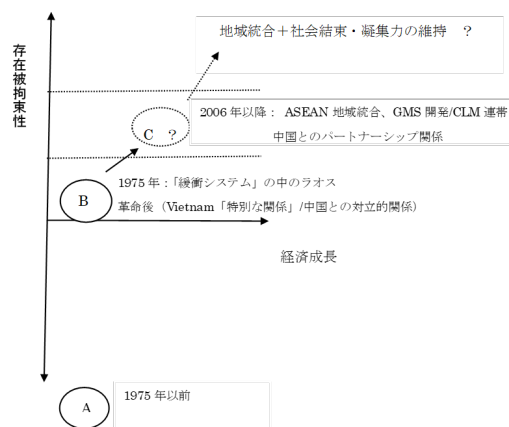
4. 研究成果

小国は、その対概念である大国の動向に生存条件が左右され、定義の確定が困難視されてきた。R.L. ロースシュタインは、「自国の安全保障を根本的に他の国家、制度、過程、発展に頼らざるを得ない国家」(Robert L. Rothstein, *The Weak in the World of Strong: the developing countries in the international system*, 1977)と小国を定義し、生存のために国家主権の独立性さえも放棄せざるを得ない国家と性格規定した。それに対して本研究における事例と理論の相互連携研究の結果、米国と中国を筆頭に大国優位の東アジア国際秩序では依然、現実ではあるが、グローバル化の進展と、リージョナリズムの国際秩序への浸透によって、東アジアの秩序形成においては、小国連合のASEANの位置づけは中心的な役割をより確かなものとしてきた。ラオスをはじめとするミャンマー(本研究計画期間中、予備調査を実施)、カンボジアにおいては、自国の安全保障と独立を確保するための国家戦略の請託性が拡大し柔軟性が確認されている。

本研究の調査を通じて、ラオスはASEANに加盟する1997年以降、メコン川流域のイン

ドシナ地域開発プロジェクトの進展とともに

図 ラオス 国家形成過程



地域形成への関与と国家形成の双方に組み、隣接する中国、タイ、ベトナムとの二国間関係を連繫させることにより、自国の政治的、経済的安定を図ろうとしてきた政策展開の実態が明らかになった。具体的には、ASEAN地域主義とくにGMS開発とCLM連帯(カンボジア・ラオス・ミャンマー)に積極的に関与することにより、大国からの存在被拘束性を拡大し、国家としての自己再編成の方策として機能させながら、「国家統合と地域拡大」という、相反する二つのベクトルを成長の原動力にしてきた。

こうした国際政治の主体としてのラオスの自画像は、地域主義の台頭と不即不離の関係でより鮮明になってきた。しかしながら、中国による高速鉄道建設計画や大規模都市開発といった広域地域戦略に伴う中国移民の急激な増大は、ラオスの国家統合と社会形成を変容させる大きな要因になってきている。それに対しても、国内政治体制の調整と、複数の二国間関係の均衡策をとることにより、自律性を担保する動きが確認できた。

一連の調査研究によって、冷戦期、大国間の勢力均衡の狭間におかれ緩衝国に過ぎなかったラオスは、メコン川流域のインドシナ地域のクロスロードとして発展を遂げ、地域形成の拠点となりつつあることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

森川裕二「東アジア共生的秩序とその方法」『和解に向けた歴史家共同研究ネットワークの検証』,40 頁~45 頁,2018 年 03 月、(査読なし)

森川裕二「東アジアとトランプ後の国際秩序—実証・実在論の相補的視座から」北東アジア学会『新しい国際関係下の北東アジア地域協力 予稿集』,15 頁~22

頁、2017年07月(査読なし)

森川裕二「国際関係理論の<社会科学>化への課題 存在論・認識論・方法論の時空論的な架橋と応用」多文化社会研究、3巻105頁~116頁、2017年03月(査読有)

森川裕二「境界国家ラオスと<地域>秩序形成」科学研究費補助金報告書『グローバル時代のマルチ・レベル・ガバナンス-EUと東アジアのサブリージョン比較』課題番号21402016、1頁~9頁、2016年03月(査読なし)

峯田史郎「地域形成の多層性とスケールにおける権力関係：中国・雲南省の地域政策を事例に」『北東アジア地域研究』21号、75-90頁、2015年。

[学会発表](計4件)

森川裕二「東アジア共生秩序とその方法(シンポジスト)」シンポジウム「和解のための現代日本学」早稲田大学、2017年12月。

森川裕二「東アジアとトランプ後の国際秩序-実証・実在論の相補的視座から」北東アジア学会第23回研究大会、日本大学三島キャンパス、2017年9月。

MORIKAWA, Yuji, "East Asian Regional Order in the light of IR Theoretical Models: Mapping the Past, Explaining the Present, and Modeling the Future" (招待講演), East Asia Studies Workshop, Sheffield University, 2017.8.30.

森川裕二「国際社会変動とメタ理論について」日中社会構造研究会『中国研究方法論の諸次元』愛知大学、2016年7月。

[図書](計1件)

MORIKAWA, Yuji, "Small States' Strategies in the Mekong Region: Perspectives from Laos, " Taga, Hidetoshi & Seiichi Igarashi, *The New Regionalism in the New International Relations of Sub-regionalism: Asia and Europe*. Routledge, pp.54-70, 2018.

峯田史郎「東南アジア大陸部における武力紛争と国内避難民への人道支援」、山田満『東南アジアの紛争予防と「人間の安全保障」』150-165頁、2016年。

[産業財産権]

出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

森川 裕二 (MORIKAWA, Yuji)
長崎大学・多文化社会学部・教授
研究者番号：90440221

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

峯田 史郎 (MINETA, Shiro)
早稲田大学地域・地域間研究機構招聘研究員